町内岩谷川内、通称開（ひらき）と呼ばれる所に長屋門のある正司考祺旧宅をご存じですか。現在、その子孫である正司泰之さんが住んでおられますが、有田の歴史の中で、正司考祺の数多くの著書当時各地の著名な学者との交友から生じた彼の学識は、目をみはるものがあります。

正司考祺は寛政５年（1793）、有田皿山に生れました。少年期のころの様子は明らかではありませんが、おそらく独学であらゆる知識を高めていったものと思われます。

数多くの著書の中で、『視聴浸筆』というものがあります。著わした年代は記されていませんが、嘉永年間の事柄が多く、おそらくそのころのものと思われます。その中に、古小場（古木場）の金山について次のようにあります。

「一、同郷古小場ニ金鉱アリ、屋形ノ尾、女郎町、牢屋前、風呂屋ノ本ナトト云処今ニ於テ土人云習ヘリ、又木戸ト云所人ヲ改ル処ヨシ、偖今ニ於テ子トモ遊ヒニチンチンノ粉米太キハ上ニナレ細キハ下ニナレト云、チンチンハ沈金ナリ、今ニ農家ニ多ク臼アリ、金摺臼ト云」

これらの地名や、遊び歌はすでに言い伝えとしても失われていますが、当時の古木場の一面を知る資料の１つです。

有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.4

石場相撲

昭和27年の石場相撲

11月に入ると、恒例の石場相撲があります。その発祥ははっきりとわかりませんが、現在わかっている資料では明治39年の次の石場相撲に関するものがいちばん古いものです。

相撲請負契約書

一、相撲組み合せは20組とする。但し、行司・呼出し・頭取まで50名とする。

一、力士は長崎５名、そのほか多久・白石・唐津地方の力士だけとする。

一、相撲請負金は80円にして、形屋（かたや）だけは勧進元より、そのほか食費、提紙などはすべて請負元より支弁する。

但し、相撲は本年11月15日より16日まで２日間とする。（以下省略）

これによると、相撲請負人が唐津や大村などの地方から力士を選んで、20組ないしそれ以上の取組みを興行していたようです。

その後、年ごとに盛んになり、大正時代にはこの石場相撲は九州素人相撲の「給金定め」、つまり石場相撲の成績によって九州内における力士の格付けがなされるという権威のあるものとなりました。

そもそもこの石場相撲は、泉山石場の山の神への奉納相撲ですから11月15、16日の両日は町じゅうの工場や商店の仕事は休みで、町民こぞって相撲見物にでかけていました。

相撲場には「ます席」が設けられ、豪勢な弁当を持参して見物をしていました。資料館にはその時に使用されたという、漆塗りの提げ弁当がありますが、その中にごちそうを詰めて泉山まで登ってきていたのでしょう。

石場相撲の季節は、そろそろ初雪がチラつくころでもあり、昔は寒さをやわらげるため一杯飲んでホロ酔い気分の男たちが、相撲の勝ち負けで口論のすえ、ケンカとなることも多かったそうです。

さて、今年はどこが優勝するでしょうか。

お供日（くんち）料理

この季節、お供日がやってきます。今は産業祭と二本立てになりましたが、町を挙げての秋祭りに変わりはありません。

旧有田町のお供日はそもそも陶山神社の祭礼で、江戸時代は毎年８月15日に行われていましたが、明治時代になってからは10月16、17日の両日に行われるようになりました。いつごろから変わったかというのは、今のところはっきりしていません。

秋は食べ物もおいしい季節です。このお供日の料理には、鮒こく、煮ごみ、おこわ、なます、甘酒などがあります。これらは周辺の町でも同様のものを供日料理として作っているようですが、煮ごみは伊万里地方のほかにはあまり例がないようです。この煮ごみの材料は、レンコン、ニンジン、ゴボウ、イモンコ（里芋）、干しシイタケ、コンニャク、コブなどを小さく切ってしょう油で煮込みます。このほかに小豆と栗を入れるのが特徴で、甘くおいしい食べ物です。

鮒こくは、こぐいともいい、鮒、大根をコブとカンピョウで結び長時間炊き込みます。外尾山地区では鮒市があり、お供日用の鮒を売っています。

お供日には道踊りや山車が町の中をねりあるきます。各家々の玄関には、卓子の上に大皿を置いて、鯛（たい）の煮びたしやカマボコ、チクワなどを彩りよく並べ、酒とともに踊りの人々や知人にふるまいます。

発掘レポート

赤絵町遺跡の発掘から　Part 2

発掘出土品にみる 先祖の暮らし

“赤絵の謎”を追って進めていた、赤絵町遺跡の発掘調査が、多大な成果をあげ８月12日に終了しました。出土した赤絵製品については次号でお知らせするとして、今回はこの調査で出土した生活用品について触れ、私達の先祖がどのように生活していたかを探ってみたいと思います。

先号でも紹介しましたが、今回の有田郵便局の発掘調査地点では旧国道に面して東西方向に３軒の家屋跡が確認されました。３軒ともに最初は17世紀後半に建てられ、江戸時代の間に２～３回建て替えられているようです。この内東側の家屋の裏では赤絵窯が確認されており、赤絵町に９軒あった赤絵屋の１軒ではないかと推定されています。

今回の調査では数10万点の遺物が出土しました。この多くは陶磁器類ですが、銅製の古銭や煙管、かんざし、杓子、かぎなどや、漆器、桶、釘なども出土しています。ちょっと意外だったのは17世紀からすでに灯明皿らしき土器や陶器が使われていることです。灯明皿は今でいえば蛍光灯などの照明器具にあたり、中に油を入れローソクのように芯を出して使いました。現代人の感覚では“明かり”はあって当然でしょうが、全国的に普及するのはおそらく19世紀のことです。それまでは夜の“明かり”といえばせいぜい月明かりがある程度でした。

日常は継ぎはぎの茶碗を使ってた

有田は焼き物の大生産地ですが、おもしろいことに生活用品としてはほかの地域の製品をわりと多く使っていました。その大部分は陶器で、かめ、すり鉢、土瓶といったあまり有田で作っていなかったものもありますが、碗や鉢なども伊万里や武雄、嬉野長崎県あたりの製品が使われていました。それでも陶器はまだなんとなく理解できますが、磁器では波佐見や山内の筒江あたりの製品も使われていましたやはり、昔から有田の磁器は高級品だったのかもしれません。だから江戸時代の終わりごろには、割れた磁器を「焼き継ぎ」といわれる方法でくっつけて使っていました。「焼き継ぎ」は割れた部分を鉛ガラスでくっつけるもので、焼き物の町で焼き物を補修して使っていたのにはちょっと驚かされました。

①白磁壺
②便所跡
③童子像と土型

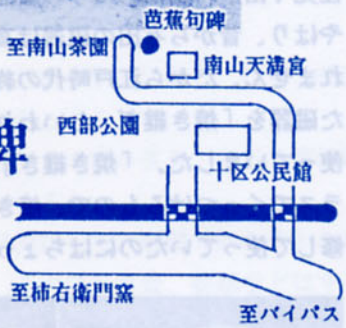
今回出土した生活用品を見ると、江戸や京都などの都市部と共通した要素が多く見受けられます。これは焼き物の大生産地という特殊な町だったからだと思われます。江戸時代の有田の人々はおそらく、質素ながらも豊かな生活を送っていたのではないでしょうか。

ちょっと　い・い・はなし　Part 1

●発掘現場での出来事。作業員は山内、西有田、有田のかたがたでしたが、発掘用具の中で「前打ち」の名称を呼ぶときにそれぞれ「唐鍬（トーガ）」、「朝鮮鍬（チョーセンガ）」と言われ、アレッと思うことがありました。明治12年の『管内農具図』という資料では西松浦郡のみが「朝鮮鍬」という呼び方をしていたようで、ここにも朝鮮半島とのつながりを見る思いです。ソウルは近い！

街角の歴史

南山天満宮の 芭蕉句碑



皿山びとの歌　第１号で、黒牟田の芭蕉句碑を紹介しましたが、今回は南山地区の芭蕉句碑について触れてみたいと思います。

南山の天満宮は、お社（やしろ）が丘の上へ移ってから展望台ができ、そこから眺める有田町の西部地区もなかなかのものです。

この天満宮の境内に芭蕉句碑があります。石造のこの句碑は半分壊れかけていますが、文字ははっきりしています。その句は

「梅が香に　の津と日の出る　山路かな」

です。この句碑の建てられた年月は不明ですが、県内にはこのほかに23基が確認されています。町内は陶山神社、黒牟田とこの南山の３基です。講談社版『カラー図説日本大歳時記』に山本健吉選による梅の句34句があり、その内に芭蕉の句が３句あります。それによると「むめが↘に　のっと日の出る　山路かな」とあり、南山のそれとは多少異なります。日の出の有り様が字句ひとつでずいぶん違って感じられます。

有田は昔から短歌や俳句をたしなむ人が多かったようです。今でも愛好の人々によって、あちこちで歌会や句会が盛んに開かれています。これらの句碑もかつてそのような人々によって建てられたものと思います。

現在、上記の３ヵ所には昭和62年度に有田町教育委員会によって陶板による説明板が設置されています。　　秋の一日、皆さんも一句詠んでみませんか。

お知らせ■月例古文書を読む会

●７月から始まった古文書教室も９月17日をもっていちおう終了しました。素敵な講師のキビシーイ講義で、参加者は江戸時代のくずし字をスラスラと読めるようになりました。さらに今後、毎月１回解読の会を続けることになりましたので、参加ご希望のかたは資料館までご一報ください。

販売書籍の紹介

●天狗谷古窯跡	定価	5,000円
●山辺田古窯址群調査報告書	定価	5,000円
●長吉谷古窯跡	定価	1,500円
●小樽２号窯跡	定価	1,500円
●有田町史	全巻定価	30,000円
	分冊定価	3,500円
別編［有田皿山の方言］	定価	1,000円

ちょっと　い・い・はなし　Part 2

●大樽の有田町文化財保護審議会会長の手塚信雄さんが、カセットテープを持参されました。その中には稗古場の篠原安雄さんによって歌われている「お力（りき）ンバッチャン」という唄が入っています。元歌は佐賀ですが、県内各地でその地のおばあさんと眼医者に替えてあるらしく、ほのぼのとした唄です。１度お聴きになりたいかたは資料館へどうぞ。

濃み筆のつぶやき

空が日増しに高くなってきました。郵便局の発掘が終わったと思いきや、また登り窯跡の調査です。正直言って体力アリマセン。でも薄（すすき）や彼岸花など、季節を感じながら仕事が出来るのは、幸せなんだとも思います。

自然環境のすばらしさは、この資料館のセールスポイントの１つですが、ことに秋の紅葉はハッと息をのむほどです。おもわず手折って部屋に飾りたい衝動に駆られますが、野におけ、何とかで、冷込みごとにあざやかさを増していく紅葉の下で、一句うなりたい心境です。（葉）

有田町歴史民俗資料館報
皿山びとの歌　No.4
発行年月日＊
編集・発行＊有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955・43・2678